別紙資料２「心の輪を広げる体験作文」（平成20年大阪府・大阪市・堺市作品集より）

大阪府　最優秀作品

最優秀賞　中学生部門

私ができる事

大阪教育大学附属平野中学校　一年

私の祖父は、私が幼い頃に脳こうそくにかかり、それから体の左半分がまひして、ほぼ動けない状態になってしまいました。しかし、その時私は幼かったので、全く意味が分かりませんでした。けれど、もちろん大きくなるにつれて、どんどんその病気の重みが分かっていきました。分かっていくにつれ、「何かしてあげたい。」という気持ちがだんだん膨らんでいきました。その気持ちから、私はいろいろなことをしました。

一つは、祖父は少しでも足が動くようになるために、いつも家の前を一往復歩きます。本当は、私はもっと速く歩けるのですが、同じように、同じ速さで一緒に歩いてあげます。

もう一つは、祖父はソースなど、塩分の高いものは普通の人と同じものを食べることはできません。そのため、野菜が入っているソースを食べるのですが、私も同じものを食べます。そうやって、同じように同じことをしたら、自分が身がわりになれた気がするのです。

しかし、ある時気が付いたのです。

「同じようにすることによって身がわりになったり、祖父の痛みや苦しさが減るのではなくて、ただの私の自己満足だ。」と。

私が祖父のためにと何か努力したところで、何も変わらなくて、私が「やってあげた。」なんて、ただ自分の気持ちを満足させているだけなんだと、そう気が付いたのです。

その時、私はとってもショックでした。

私がどんなことをしても、助けてあげられないし、今まで当たり前にやっていたことができなくなる気持ちくらい、私にも分かるから、分かれば分かるほどつらかったです。

けれど、ある時、祖父が私に

「おじいちゃんのために、いろいろやってくれてありがとう。とっても嬉しいよ。」

と言ってくれました。その時、私は本当にとても嬉しかったです。

「私には、病気を治すことはできないけれど、喜ばすことはできるんだ。」と思いました。

日本には、いや、世界にはもっとたくさんの体の不自由な人がいます。けれど、点字ブロックやエレベーターなど、その様な人のために、街に工夫はたくさんされています。けれど、それが活用されるためには、「やさしいあふれる社会」になる事が必要です。その様な社会になるためにも、病気を治す、という手段以外にも、人の役に立てるという事を知り、喜ばれるような、そんな人に世界中の人がなればいいと思います。また、私もたくさんの人に喜ばれるようになろうと思います。

大阪市　最優秀作品

最優秀賞　中学生部門

心をつなぐコトバ

大阪教育大学附属平野中学校　三年

「ありがとう。」これは私の好きな言葉です。なぜかというと、この言葉は人と人をつなぎ、心を温めてくれるからです。

辞書で、ありがとう・という言葉を引くと、「感謝の意をあらわす挨拶語」と載っていました。私には、ありがとうが挨拶語だということに違和感がありました。挨拶といえば、「おはよう」とか「さようなら」等という語が浮かびます。これらには深い意味はなく、形式的にかわす言葉です。しかし、同じ挨拶でも「ありがとう」の言葉の裏には、相手に対しての感謝の気持ちだけでなく、その奥に人と人の心のつながりがあると私は思いました。

ある日、私と妹が自転車に乗っていて、短いトンネルに差しかかりました。そのトンネルの歩道はとても狭く、自転車一台がちょうど通れるくらいの幅しかありませんでした。私は反対側に車イスに乗った方がいたのに気付かず、トンネルの中へこぎ出してしまったのです。途中でそのことが分かった私はかなし慌てましたが、その方は私たちがトンネルを抜けるまで、反対側の入り口でずっと待っていて下さったのです。

本来なら私たちの方が待つべきだったのにこのようになってしまい、私は申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。しかし、すれ違った時、

「すみません。」

と言うと、私たちの失敗だったのにその方は

「ありがとう。」

と言って下さったのでした。なぜか私は、この言葉がもにしみました。その時、どんな気持ちでその方がありがとうと言ってくれたのかは分かりません。けれどその言葉は、私の心をとても軽く、やさしい気持ちにしてくれました。

普段から市バスに乗って学校に通学している私は、車イスの方がバスに乗ってくるような感じのような顔をする客をよく見かけます。きっと、乗降に時間がかかるため、予定よりバスの到着時刻が遅れるのが迷惑なのでしょう。以前は私も「しょうがないか……。」という気持ちしかありませんでした。でも当時、車イスに乗っている方が助けてもらった人へ言った「ありがとう。」の言葉から私たちはやさしい気持ちを分けてもらっていたことに、私自身が気付いていなかっただけでした。

一度、ありがとう、という言葉に感謝して過ごしてみてはどうでしょうか？　それだけで、もっと人と人の心の輪がつながっていくと私は思っています。そして、その輪が一人でも多くの人に広がっていくように願っています。